

調査区の位置と旧地形の復元図

上の図は既往の調査結果に今年度の結果を合成したものです。これをみると、調査地全体で古い船場川の河道跡が見つかることがわかります。今年度の調査区からも古墳時代に流れていた河道の跡が2条見つかりました。逆に河道から離れた場所は微高地にあたり、人が安定して暮らすのに適しているといえます。調査区の2区からは古墳時代中期から後期の竪穴建物跡が複数棟見つかり、過去の調査でも周辺から後期の建物跡が発見されていることから、この時期に集落が形成されていたと考えられます。

今回の調査で見つかった最も古い遺構は、弥生時代前期の溝です。溝の上層から前期後半の壺が出土しました。また、弥生時代後期の竪穴建物跡がさらに西側の1-2区で見つかりました。

さて、今回の調査では6棟の竪穴建物跡を検出しました。その平面形は弥生時代後期のものが円形または方形で、古墳時代のもは全て方形プランとなっています。この違いについて少し触れてみたいと思います。

一般的に住居として使用された竪穴建物は、弥生後期のものは地域差が顕著で、例えば、関東では方形住居が主流で、中国・東海地域では円形と方形が混在しており、近畿では円形住居が主流を占めるものの集落単位で見ると円形主流、円形・方形の混在、方形主流の3パターンが認められるとされます。

これが古墳時代に入る頃、つまり各地の土器が交流を始めた時期になると、各地とも隅がわずかに丸くなる程度の方形竪穴住居に変わってしまいます。古墳時代中期になると竈が採用されはじめ、後期になると竪穴の規模にかかわらず、方形プランとその対角線上に配される4本を基調とする支柱穴・竈・貯蔵穴をもつ形がパターンとして定着する地域が多くなり、住居の規格化が一層進みます。

このように竪穴住居の平面プランをみても、弥生時代後期から古墳時代への推移は、民衆生活にいろいろな変化をもたらしたことがわかるのです。



1-2区の竪穴建物跡から出土した器台

2010年度 飯田手柄地区発掘調査成果説明資料

平成22(2010)年11月19日 印刷発行

姫路市埋蔵文化財センター

〒671-0246 姫路市四郷町坂元414番地1 TEL 079-252-3950

<http://www.city.himeji.lg.jp/maibun-center/>

# 飯田手柄地区第6次発掘調査成果説明資料



発掘調査地点を北東から撮影

姫路市埋蔵文化財センターでは飯田手柄地区の区画整理事業に先行して畑田遺跡(昨年度までの名称は(仮称)船場川東区整遺跡第6地点)と竹の前遺跡の発掘調査を行っており、今年度はその6次調査を飯田地内(畑田遺跡)で実施しました。

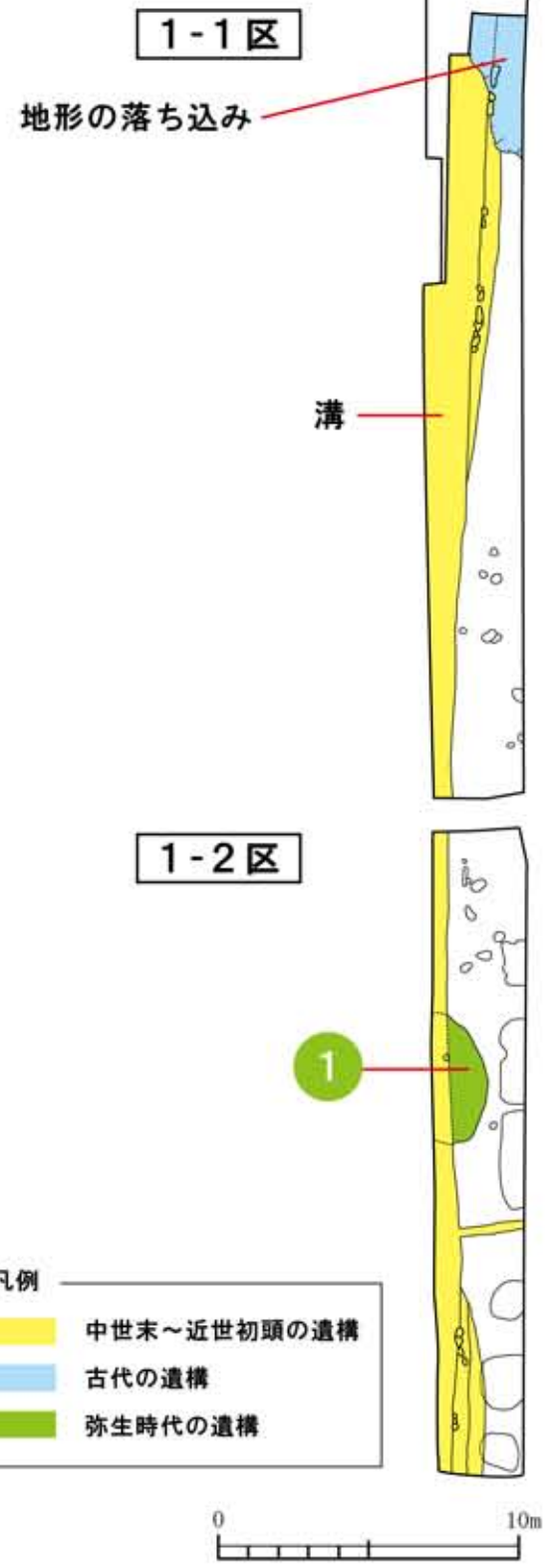
飯田はかつて飯田村と呼ばれ、文献資料では江戸時代の初めにその村名を確認することができます。18世紀中頃に編纂された地誌『播陽万宝智恵袋』によると、「玉手、亀山の間を飯田といふ」とあり、かつてこの村の南に500戸ほどの大村があったが、天福年中(1233~1234年)の落雷で一家残らず焼失し、天正年間(1573~1591年)頃には60戸ほどであったと伝わります。

このような飯田の歴史について、発掘調査を行なうことで、より古い時代の様相を明らかにすることができます。

今回の調査の結果、弥生時代前期の溝・後期の竪穴建物跡、古墳時代中期から後期の竪穴建物跡・河道跡、古代から中世前半の溝等の遺構とこれらの遺物が発見されました。



■ 調査区遺構配置図



**2 竈(かまど)**  
一番北側の竪穴建物跡で見つかった古墳時代中期の竈の跡です。



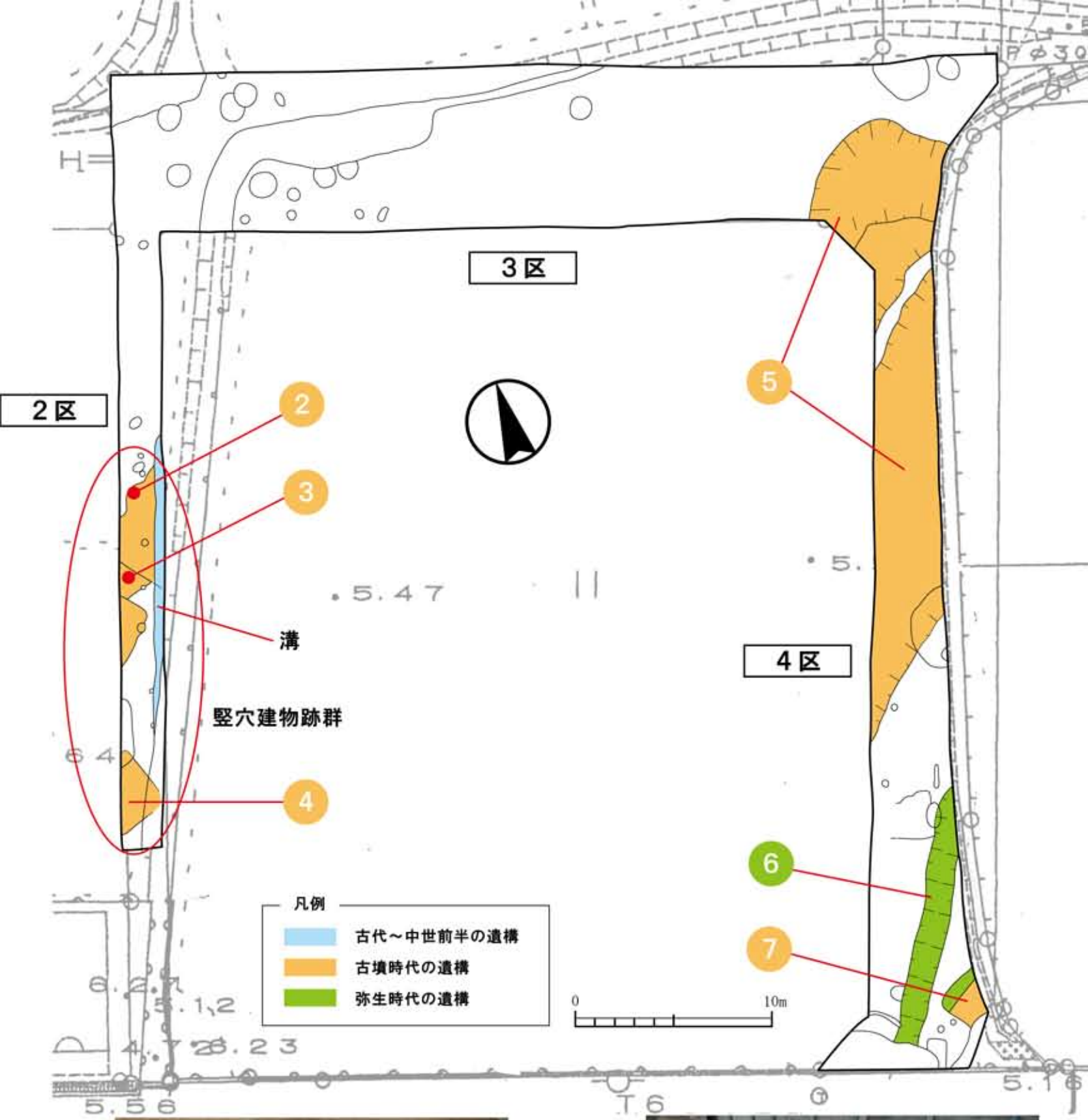
**3 甎(こしき)**  
底部に2つの穴をもつ甎です。古墳時代中期のものと思われます。



**4 竪穴建物跡**  
古墳時代の方形の竪穴住居跡です。南北方向の一辺は3.9mを測ります。



**5 河道跡**  
船場川の古い流路跡です。古墳時代後期に完全に埋没したと考えられます。



**6 溝**  
弥生時代前期後半に埋没する溝です。上層から壺が出土しました。



**7 竪穴建物跡**  
建物跡が上下に重なっています。上の建物は古墳時代後期のものです。



**1 竪穴建物跡**  
弥生時代後期の円形の竪穴建物跡です。壺・鉢・器台等の遺物が出土しました。